

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32644
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2014～2016
課題番号：26370174
研究課題名(和文) 描かれた明治のジェンダー(明治30年頃までを中心に)

研究課題名(英文) Illustrated women in Meiji period

研究代表者

乾 淑子(Inui, Yoshiko)

東海大学・国際文化学部・教授

研究者番号：40183008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：楊洲周延を中心とする明治期の女性表現について、時代風俗の再現性と当時のジェンダー認識との合一、不一致、問題意識などを考察した。

再現性の問題については、髪型、着物、洋装などの細部について非常に再現性が高いことが確認された。周延はファッションプレートや西洋楽譜などの情報源にも当たって、より正確な表現を心がけた可能性が考えられる。

また江戸幕府大奥の女性に関するシリーズ等によって人気を博した周延であるが、その一方で学ぶ女、新時代を生きる女などに大きな関心を寄せていたことが作風から推測される。他の錦絵師とは異なって、女学生などの作品に添えられた揶揄的な表現がなく、また読書する場面の割合が高い。

研究成果の概要(英文)：I made the following observation over the painted images of the women in the Meiji period, centered on nishiki-e of Chikanobu, about the reproducibility of the lifestyle of that era, through which I considered the correspondance, mismatching and awareness to the perception of gender of the time. For the reproducibility, it was confirmed that several items were reproduced very well in detail, like hairstyles, Kimonos and western clothes. It is likely that Chikanobu tried to be careful of describing more accurately, examining also the sources of information, such as fashionplates or musical scores.

Although Chikanobu became popular for the series on the women in O-oku (shogun's harem) of the Edo Shogunate, judging from his style, it seems that he was very interested in the women who study or the new women. Unlike other painters of nishiki-e, he didn't add any mocking expression to his works like ones with schoolgirls, and there are a high percentage of scenes with girls reading.

研究分野：民族芸術、服飾史

キーワード：明治 ジェンダー 服飾 錦絵 女子教育

1. 研究開始当初の背景

当該研究の始めは、楊洲周延の「現世佳人集」(1890年)という3枚続きの錦絵に惹かれたことであった。明治期の錦絵には物尽くし・人尽くしの様な様々な風体の男女を描くことがよくあるが、この作例には当時の階級とジェンダーが見事に表現されていることに驚いた。女官、貴顕婦人、貴顕令嬢、紳士婦人、紳士令嬢、教師、女学生、芸妓、権妻の9人の女性が整然とそれぞれの立場を表す身の回りの什器に囲まれて立ち、または机に向かう姿は簡潔にして、彼女たちの身分階級等が実に明白に表現されていた。水野年方などの作家によるよく似た趣向の作品(年方の「今様柳語誌」1888年)は数あるが、それらは単に服飾などの相違を表現するにとどまり、ジェンダーの階層性への視点は周延に及ばない。周延の表現は、単に服飾などを再現しているのみならず、女性たちの生活や社会における立場などへの非常に深い理解によって裏打ちされているものであろうと考えることができた。そこで周延という絵師を調べてみると、大奥や明治美人画などの女性表現を得意としていたことが分かり、徐々に当時のその他の絵師たちとの比較、検討などを始めていた。

2. 研究の目的

楊洲周延の作品を通じて、明治期のジェンダー、女子教育などの実態を絵画的な表象の中から解明し、この分野の研究の一助ともなることが目的である。

3. 研究の方法

まず、周延のライフヒストリー、作品の全体を掌握し、当時の他の絵師と比較する。

また明治初期から中期にかけての社会の動静の中で女性のおかれた状況を知る。特に女子教育、女性の社会進出、政治参加などについて。

更に当時の衣料について知る。服飾という現代に残る資料に現れた女性の姿の中に表現された女性の様々な立場、状況を表した周延の作品をより正確に理解する。

そのために当時の髪型(多様な洋風の髪型、また明治期に流行した日本髪など)、着物、洋服(女学校の制服、看護服も含む)などの詳細を知る。また周延の描いた情景内での文物(楽器、楽譜、什器、新聞など)についても調べる。等々の細かな事実関係を調べていくことを第一に優先した。

また、改進黨新聞等に連載した挿絵について、周延と他の絵師による挿絵とを比較し、周延の思想的背景を探る。

4. 研究成果

従来言われていた通り、周延は女性を描くのが得意な絵師であったことは確かである。107枚の揃い物である『千代田之大奥』(1895年～1897年)は後期から晩年にかけての代表作である。これは江戸期には表現を制限されていた將軍家の大奥への関心がまだ持続する社会であったこと、および往時の大奥の実際を知る女性たちがまだ存命であり、聞き書きができたこと等により非常に好評をもって迎えられた。また似たようなテーマによる作品群も存在することから、需要は一時的なものではなく、それを当て込む出版者からの注文が続いたことを示す。周延による『千代田之御表』(1895年～1897年)という男性の幕閣、家臣団や足軽等を描いた115枚の揃い物もあるが、『千代田之大奥』の人気の比ではなかった。

その他にも『幻灯写真競』(1890年)、『東風俗福つくし』(1890年)、『真美人』(1897年)などの周延による美人画の揃い物が知られる。これらの美人画には先行する、または同時代の絵師たちによる作品群が存在する。

時代が近いものでは豊原国周による『見立昼夜廿四時之内』(1890年)、同じ国周による『開花人情鏡』(1878年)、月岡芳年による『見立多以尽』(1877年～1878年)、同じく芳年の『風俗三十二相』(1888年)などが有名である。これらはある種の遊びとして統一的なテーマを設け、それを絵師がどのような趣向でアレンジするかを楽しむ趣味的な絵画であると言える。

それらの他の絵師との違いの一つは、周延の場合には読書をする、新聞を読む、学校に通うなどの女性や少女が描かれる割合が高いことである。『幻灯写真競』のなかには「学校試験」(家で本を読みながら学校へ通うことを想像する少女たち)、「隅田川」(新聞を読む妾風の女性)などが描かれ、『真美人』シリーズのなかには「眼鏡」(明らかに女教師と思われる眼鏡をかけた女性)、「女学生」(傘をさし、洋書を持つ女学生風)、「新聞」(こたつで新聞を読む家庭婦人)などの作例がある。(この真美人シリーズは他の作例と異なり、番号のみが付されているために、各所蔵館や研究者がそれぞれに別な名称で呼ぶが、本稿では周延研究の第一人者である新藤茂氏の命名を採用する。)

さらに『幻灯写真競』の中の「洋行」、「女史演説」などは、単に学ぶのみならず、海外留学を目指す女性や、政治的な発言をする女性までも描いている。

国周の『開花人情鏡』のなかの「勉強」や『見立昼夜廿四時之内』のなかの「午後一時」には洋書を読む女性が描かれ、また芳年の『見立多以尽』には「洋行がしたい」がある。しかし、これらにはそれらの女性の行為を揶揄するような詞書がそえられ、同時代の女生バッシングに通底する視線が感じられる。それに対して周延にはそのような言辭が見られないのである。

また、周延の「梅園唱歌図」(1887年)と「欧州管弦楽合奏之図」(1889年)に描かれた楽器(オルガン、ピアノ)や楽譜の表現を見ると、1887年頃にはまだ不正確でぎこちなかったものが2年後の1889年になるとピアノやオルガンの黒鍵の位置が正確になり、また楽譜も適当に横線のなかに黒いものが飛んでいるのではなく、音符の形も、シャープなどの記号もきちんと描かれるようになる。このようにおそらく周延は自ら求めて再現性を高めようと努めたことがうかがわれるのである。

さらに洋装についてみると、『東風俗福つくし』のなかの「洋ふく」に登場する少女『今様東京八景』のなかの「滝の川乃春嵐」の女兒の着用する洋服は『Societe des Journaux de Modes Reunis, Costumes d'Enfant』(1886年)というフランスで発刊されたファッションプレートに描かれたデザインである。この時代にはすでに、日本の宮中では欧州のファッションプレートを見て自前で洋服を作っており、また森茉莉の思い出のなかでも鷗外と妻がファッションプレートを見て注文してくれた洋服などについて語っていることから、周延もなんらかの形でその種のものを参照した可能性を指摘できる。

この頃には洋装化、束髪の普及などの洋風の摂取がある一方で、着物も変化しつつあった。幕藩体制的な身分制度や奢侈禁止令などに縛られなくなり、化学染料の摂取などあって、従来とはかなり様相を異にする着物が次々と生産されたのである。

女学生風俗というときよく言われるのは「袴」であるが周延の『真美人』に描かれた「女学生」は帯付きの姿であって袴は着用していない。それでも洋傘、洋書、着物の下に重ねたシャツ、指輪、リボンなどが当時の女学生らしさを十分に表現している。『幻灯写真競』の中の「女史演説」にしても、主人公の女性は袴をはいておらず、フキ綿の入った二枚重ねの着物に帯付きである。傘を持ち、髪には花飾りをつけて、靴をはく。帯締めには帯留もついており、最先端のファッションである。一緒に描かれる洋犬はおそらく、彼女が家のなかにいる猫や愛玩犬のような存在ではなく、外歩きする犬のような存在であることを示すのだろう。

女学生の袴の普及は1890年前後からであるというから、上記の2点でも袴無しの帯付き姿であるのは当然なのである。

ただし明治初期の開化絵に登場する女学生たちは袴をはいているが、これは男袴であり、女学生用に下田歌子が開発した言われる行灯袴とは形も機能も異なるのであり、女子教育と袴の関連を考える場合にはこの2者は区別しなければならない。

さらに髪飾りとしてリボンを用いるか、花を用いるかについても、1894年に始まったと見られる国産リボンの製造(東京都谷中の工場跡が最近まで遺存した)との関連を視野に

入れる必要がある。この分野の研究はまだ処に着いたばかりであるが、新出資料も豊富であり、進展が期待される。

また『東風俗福つくし』には各紙面に必ずローマ字表記が加えられており、それが正確である。現代から見れば大したことではなさそうであるが、例えば、国周の『見立昼夜廿四時之内』と『開花人情鏡』、月岡芳年の『見立多以尽』の横文字がローマ字ともなんとも言えないものであることを思えば、周延の努力のほどが知られる。

さらに政治を描いた錦絵を見てみよう。1889年の憲法発布、翌年の国会開催は多くの絵師が描いており、周延も例外ではない。この時代の錦絵は新聞や写真週刊誌のような役割を果たすメディアでもあったからである。ただし多くの画家の描いた国会風景と異なり、周延だけが国会に臨席する洋装の女性を描いている。この洋装の女性は桐の模様の壁紙を背景に描かれることからして、皇后であると言える(現代では忘れられているが、明治期には男性皇族は菊、女性皇族は桐で象徴される傾向があった)。

もちろん実際に皇后が臨席したかどうかは重要ではない、この時代の錦絵の例にもれず、あらかじめ予定のわかっている行事については、それに先立って錦絵を発行することが多く、この作例も印刷発行日(印刷は8月23日、発行は9月)から推して現実(第一回の国会開催は11月25日)に先んじている絵である。だから皇后を描くという周延の絵が現実に即しているか否かよりも、彼がこの席に女性を加えた唯一の絵師であったということに重視したい。つまり、女性の政治参加が正式に禁止された(12月3日までは女性の傍聴は禁止されていた)時代であったにもかかわらず、彼は国会に皇后の姿を描いたのである。

このような周延の女性観がどのように形成されたのかについては、周延の日記などの文字資料が存在せず、また周延に言及する資料もあまりないことから、不明である。しかし、これらの絵画を見る限りでは、彼は少なくとも、女は文字が読めないくらいが可愛い(松平定信の言)というような女性観を持ってはいなかっただろうと推測することができるのである。

そのように考えるに至った理由を、彼の人生のなかから強いて、探すとすれば、彼は幕府側について幕末の戦争を戦った越後高田藩士であり、維新後に明治政府の官僚などにはなれず、絵師になった人であったこと、また同じような境遇の人々が集って、反政府的な新聞を作っていたことなどが挙げられよう。しかし明治中期になると政治を語る大新聞は結局売り上げを伸ばしきれず、また軽い読み物的な小新聞との中間形態を目指して変身しつつあった。そのような新聞の一つである改進黨新聞に周延は挿絵を描いていた。これに連載された須藤南翠の「一顰一笑 新粧

の佳人」、樋口一葉の「別れ霜」などの挿絵である。

当時ベストセラーであった東海散士の「佳人之奇遇」などから「佳人」を冠した小説類が様々なメディアに登場した。「一顰一笑新粧の佳人」もその一例であるが、佳人という言葉は単なる美人ではなく、上品で知性を伴うという意味で用いられ、一種の理想形の若い女性を示す言葉でもあった。「佳人之奇遇」では海外留学をして事業を興す女性が描かれ、「一顰一笑 新粧の佳人」では政治に目覚める女性が主人公である。

また現実に生きた才媛である一葉の作品を読んで挿絵を描いた。既述の小説類が現在の目からみると紋切り型で、薄っぺらさを感じさせるものであるのに対して、人の心の深淵を覗き込む手練の文章が女性の筆から生まれるのを目の当たりにするという経験をえた。この「別れ霜」はまだ初期の作品であり、奇跡と言われた若い晩年ほどの筆のさえは見られないが、一葉という人の異常なまでの文筆への熱を、周延は十分に浴びたであろう。

改進黨に集う人々の中からは社会主義者であり、政治犯として拘留される人々も珍しくなかった。このような環境の中で周延はその時代としては、随分と開けた女性観を培ったのではないだろうか。

それは「現生佳人集」に表されたジェンダーの階級制への視点でもあったのだ。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

乾淑子、楊洲周延の美人画-----風俗をどう描くか、東海大学国際文化学部紀要、査読あり、第9号、2016年、p47-62

乾淑子、楊洲周延はフェミニストか?、東海大学国際文化学部紀要、査読あり、第8号、2015年、p15-28

乾淑子、装幀の美、民族芸術、査読なし、第31号、2015年、p162-163

〔学会発表〕(計 4 件)

乾淑子、明治風俗をどう描くか---錦絵の場合、明治風俗研究会、2017/2/19、神田学士会館

乾淑子、楊洲周延の美人----典型としてのジェンダー、ジェンダー史学会、2015/12/13、大妻女子大学多摩キャンパス

乾淑子、錦絵に見る明治期の女性像---芳年・周延、近代風俗研究会、2015/10/23、

札幌市男女共同参画センター

乾淑子、楊洲周延はフェミニストか?、北海道芸術学会、2015/3/15、北海道立近代美術館

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
ありません

6. 研究組織

(1)研究代表者
乾淑子(INUI Yoshiko)
東海大学・国際文化学部・教授
研究者番号：40183008

(2)研究分担者
ありません

(3)連携研究者
ありません

(4)研究協力者
ありません